



聞こえますか、

生きていることの喜びの声が。

聞こえますか、

生きてほしいという願いの声が。

聞こえますか、

生きたいと思ういのちの叫びが。

如是我聞、

ワレ、カクノゴトク、

キキタマイキ。

わたしの声が、

わたしにはいちばん聞こえない。

# 目次

contents

|                   |    |
|-------------------|----|
| 教区教化事業行事予定／車椅子を寄贈 | 3  |
| 教区教化委員会ニュース       | 4  |
| 親鸞の鼓動・八 『往生要集』を読む | 8  |
| 御遠忌通信             | 10 |
| ちよっといこか／しゃらりんちゃん  | 12 |

## 聞

文 澤田 見  
書 畠中幸代

形声。耳と門（音を示す）との合字。今は聞だけを使うが、もとは聴（意識してきく）・聞（きこえてくる）を区別した。

小学館『新選漢和辞典』より

# 教区教化事業行事予定

## 真宗の仏事と法事を考える講座

日時 4月9日(木) 午後6時から  
会場 教区教化センター会館 研修室  
講師 近松譽一氏(第4組 慧光寺)  
対象 住職・「寺族」

## ハンセン病問題に関する公開講座

日時 4月10日(金) 午後6時から  
会場 教区教化センター会館 研修室  
講師 神谷誠人氏  
(ハンセン病国賠訴訟瀬戸内弁護団)

## 聖典講座

「親鸞の思想」  
『教行信証』「化身土巻」に学ぶ  
日時 4月14日(火) 午後6時から  
会場 教区教化センター会館 研修室  
講師 藤場俊基氏(金沢教区 常讃寺)

## 組門徒会員研修大会

日時 5月9日(土) 午後1時から  
会場 難波別院本堂 他

テーマ 宗祖としての親鸞聖人に遇う

組門徒会員の自覚と使命

講師 湯浅成幸氏  
(熊本教区 山田寺前住職)

## 門徒女性と坊守の集い

日時 5月14日(木) 午後1時半から  
会場 難波別院同朋会館 講堂  
テーマ いのちとの出会い  
講師 佐賀枝 夏文氏(大谷大学教授)  
参加費 300円

## 遠松忌法要

日時 6月20日(土)  
会場 第23組 浄泉寺  
講師 多田孝圓氏(第7組 圓乗寺)

## 大阪教区全推進員の集い

日時 6月27日(土)  
会場 御堂会館大ホール  
講師 太田浩史氏(高岡教区 大福寺)

# 車椅子を寄贈

## ボランティア推進会議



上山し、岡本証寿研修部長立会いのもと、安原晃宗務総長に車椅子を贈呈しました。その後、長谷主査から平常の教区での取り組みや今回の寄贈に至った経緯が説明され、安原総長からは今回の採納に対する謝辞と、今後宗派がさまざまなボランティア活動を行っていく重要性や災害時における宗派の取り組みについて話があり、貴重な意見交換の場となりました。

なお、本年1月7日・8日にご協力をお願いしておりましたお餅・衣類・プルタブのボランティアはお餅216kg、お米72.5kg、プルタブは579.4kgでした。衣類コート・セーター類など合わせて667

教区ボランティア推進会議では、2003年からプルタブ(空缶の蓋部)を収集し、リサイクル業者を通じて換金して、車椅子を購入する取り組みを行っています。このたび、真宗本廟同朋会館に車椅子を1台寄贈しました。12月4日には、宗務所応接室で採納式が執り行われ、長谷俊成主査(第22組満泉寺)をはじめボランティア推進会議委員4人が



点が寄せられ釜ヶ崎炊き出しの会に贈ることができました。また今後とも協力してほしいのほどよろしくお願ひします。

# 教区教化委員会ニュース

## 推進員養成講座実行委員会

教区教化委員会「研修・講座部」では、去る11月5日に難波別院本堂地下研修ホールにおいて、各組の推進員養成講座実行委員と同朋の会教導の合同で、推進員養成講座実行委員会が開催されました。

当日は、まず藤政朋宏教区駐在教導から推進員養成講座実行委員と同朋の会教導としての任務を説明した後、現在の推進員養成講座の実施現状について説明がされました。その後、最近推進員養成講座を修了した第2組の池田英二郎委員、現在実施している第21組の北畠顯信委員、そしてこれから実施する第19組の高間重光委員と林眞悟委員からそれぞれ報告がなされ、その後の質疑・意見交換でも活発な発言がなされました。

### ●幹事より

1999年度から始まった第2期教区推進員養成講座は約半数の組で実施されています。今回、いろいろな組から取り組みについてご意見をいただき、組のスタッフを中心に、鋭意協議を重ね、どのように

すれば参加者が充実した講座を受講できるのかを検討しておられるかわかりました。ある組では親鸞聖人のご生涯を組の若手スタッフが寸劇で表現したり、また別の組では青年会による人形劇を行ってみたいと、受講者に飽きさせない内容にしてもらえます。最近の傾向としてもう一つ見られるのが、若手スタッフの参画ということでしょう。これまで、年配の住職にまかせっきりだった組の教化事業も、継続的な推進員養成講座という場で座談会の司会や記録などに関わることで、主体性をもち自らが学んでいるということです。推進員養成講座のいいところは組のスタッフで作り上げていき、座談会などではご門徒と問題点を語り合うことで、お互いが勉強しあえる環境になるということです。

(研修・講座部幹事

第26組西教寺・成井暁信氏)

※今後、推進員養成講座の開催を検討されている組は、組長を通じて教務所(担当：藤政駐在教導)までご相談ください。

## 子ども同朋唱和講習会

「お寺に響け！子どもの声」を願いとして、子どもたちにとってお寺が家庭・学校以外の居場所(サードプレイス)になればと、子ども同朋唱和講習会の呼びかけをさせていただきましたところ、大和太谷別院よりご依頼があり講師として出向かせていただきました。

最初、子どもたちは少し緊張した様子でしたので、大きな声を出し、元気を引き出すようなゲームから始めました。座布団を使ったゲームでは、子どもたちが仲良く協力でき、また自由な発想力を引き出せるように心がけました。ゲームからスタートしたことで、正信偈のおけいこでは大きな声で一緒にお勤めができました。子どもたちはみんな上手にお勤めをし、中には暗記している子どももいて驚きました。また、お念珠や勤行本の扱い、また阿弥陀如来や親鸞聖人のお話もさせていただきました。

子どもたちが家庭でお寺の話をしたり、お内仏に手を合わせてお勤めをしていただけることによって、家族そろってお寺に足を運んでいただける大切なご縁となればと願っています。

(同朋唱和講習会講師

第18組光徳寺・松谷泰明氏)





# 部落差別問題に学ぶ会実行委員会

## フィールドワーク報告

教区教化委員会の「部落差別問題に学ぶ  
実行委員会」では、さる1月24日、奈良県

の「おおくぼまちづくり館」でフィールド  
ワークを行いました。参加された実行委員



の小松仁氏に一言いた  
だいております。

当日、説明いただき  
ました福西満先生（お  
おくぼまちづくり館保  
存事業運営委員会）の  
お話と資料によると、  
洞村が移転する契機と  
なったのは、神武天皇  
陵の存在です。神武天  
皇は紀元前660年に  
即位した初代天皇と言  
われていますが、実在  
しませんでした。『古事  
記』と『日本書紀』には、  
実在しなかったはずの  
神武天皇の墓だけは記  
述されていますが、場  
所がはっきりしません  
でした。神武陵の位置  
を確定するための調査

や論争が繰り返され、結局、江戸末期に候  
補地の一つであったこの地「神武田」に決  
定したということです。

移転の理由は二つありました。一つは、  
村の領域と1863年に作られた神武陵が  
重なり、穢れた存在として差別されていた  
洞村が、神聖な天皇陵を見下ろす位置にあ  
り、「恐れ多い」とされたことです。

もう一つの理由は、部落改善運動家たち  
が自主的に土地の献納を行い、劣悪な住宅  
や環境の改善を進めようとしたことです。  
移転を希望する洞村に協力する他地区の村  
はありませんでした。そこで、高市郡郡長  
などが説得し、近隣の集落を移転地とする  
ことが決まりましたが、移転は、困難を極  
めました。こうした経緯を経て、縦横に街  
路を整備し、共同浴場や教宗寺、生国魂神  
社などの施設と171戸が移転して新しい  
町を造りました。しかし、経済情勢は厳し  
く、ほとんどの家が借金を負う結果となり  
ましたが、当時としては、画期的な整った  
まちづくりが行われました。

第二次世界大戦後、靴づくりが村の生業  
として定着すると、村の領域が少しずつ広  
がり、差別により自由に就業できなかつた  
他の部落の人々が靴職人として集まってき  
ました。そうして家を建てる際、無計画に  
建築されたため、住宅が混在し、道路も狭  
く、防災上の問題もありました。

近年、住環境の改善をめざして、橿原市

と大久保地区は1985年から「小集落地  
区改良事業」として2回目のまちづくりが  
行われました。「おおくぼまちづくり館」は、  
こうした「まちづくり」の集大成として位  
置付け、人権学習とコミュニティーの交流  
の場として開設されました。

そして、今回のフィールドワークは、福  
西先生のご案内で、碁盤の目に区画された  
町並みを通り、生国魂神社に。そして、広  
大な敷地で非常にきれいに整備された神武  
天皇陵（宮内庁管轄）へ。最後に、旧洞村  
のあった畝傍山の山腹まで登りました。途  
中には、湧き水の井戸があり、あちらこ  
ちに棕櫚の木が雑木の中にありました。む  
かし、庭木として家々に棕櫚を植えていた  
そうです。住居跡は、雑木が生い茂り、荒  
れ果ててまったく判りませんでした。庭  
木の棕櫚が今でも残っているのは、村人の  
想いが今でも生きているように思えまし  
た。

天皇制、穢れ、国家権力と民衆、私に染  
みつけた差別意識など、気づかなかつたこ  
と、知らなかつたことを学んでいきたいと  
思いました。

（部落差別に学ぶ実行委員会委員

第12組唯稱寺・小松仁氏）

# ハンセン病問題に関する取り組み

教区教化委員会行事部（三好泰紹幹事）では、ハンセン病問題に関する取り組みとして、国立療養所<sup>おおくさうかみん</sup>久光明園（岡山県瀬戸内市）入所者の方たちとの交流会を年間4回計画しております。

特に難波別院報恩講期間中には、「ハンセン病問題パネル・作品展」を開催し、平素から交流を行っている「<sup>おおくさうかみん</sup>久光明園浄土真宗法話会」の方たちをはじめ、作品展に出展いただいた方や退所者の方に難波別院へ参拝いただいて交流会を開催しております。

また、今年度は一泊研修会も行い、大島青松園（高松市）と<sup>おおくさうかみん</sup>久光明園の二園で交流会を開催しました。いずれの交流会も教区教化機関の委員と組人権推進要員にご案内して参加を呼びかけております。

今回は、それぞれの交流会に参加された方から感想を寄せていただきました。



## ●難波別院報恩講交流会に参加して

交流会に出席させていただくことになり、その案内文を読むと「他人ごとにしていませんか」とあり、私は衝撃を受けました。私は何も知らない。そして知ろうともししていない私がここにいるのです。その日、交流会の前にハンセン病問題についてのパネルを見せていただきました。例年でしたら単に「辛かっただろうな」と思ったり、また療養所の方が作られた手芸や工芸、書道などの作品を見せていただいても「上手にできているな」としか思わなかっただろうと思います。しかし、パネル展を見せ

ていただいていると、療養所に入るとは親や子ども、親戚、友達とも縁を切らなくてはいけない。隔離されると誰にも会えないということ、もし私がその立場であればどうだったのだろうと思うと胸が熱くなり、今まで知ろうとしなかったことが本当に恥ずかしくなりました。そして、そのまま交流会に出席させていただいたものから、皆さまのご苦勞を思うと涙があふれてきて何も言えず、報恩講を楽しみに来られたのにいやな思いをさせてしまったのではないかと申し訳なく思っております。

交流会の後、参加されていた退所者のご夫婦の方と百貨店で催されていた花展に出かけました。すると、「このようなものは初めて見させていただきました」と言われ、私には当たり前と思っていたことがその方にはそうではなく、また知ろうとしてこなかった私を思い知らされたことです。ご夫婦が「来年は他の療養所の方も一緒にこのような花展に来たいものですね」と言ってくださいだったので、私もうれしくなっていました。

そして12月に入り、そのご夫婦の方と再会する機会を得ました。そこでいろいろお話を聞かせていただいたのですが、入所するときのお母さんの顔が今でも思い出されるという話、また息子さんの結婚のことで「彼女のご両親に病氣のことがわかれば話が壊れないだろうかと思うのです」と言わ



れたことに驚き、こんな差別があつていいものだろうかと思いました。ハンセン病についてまだまだ偏見のある世の中、そのようなことのない世の中になることを願うばかりです。入所者や退所者が安心して誰とでも病氣のことを話せるようになればいいと思います。本当に今回、交流会に出席させていただいて知らなくてはならないことを学ばせていただきました。療養所にも一度行かせていただきたいと思います。本当にありがとうございます。

（教区出版会議委員

第16組圓光寺門徒・田中まさ代氏）



## ●実行委員として関わって

「ハンセン病」、私はこの病気を正しく認識していませんでした。その私が実行委員となり、入所者の方々との交流は正直不安でした。

初めての療養所での交流会で、入所者の方に「兄ちゃんよく来てくれた」と笑顔で迎えられたとき、私はスツと楽になりました。私はどのように接すればよいのか悩んでいたからです。

初めての交流会は緊張は解けたものの何もできないまま終わりましたが、入所者の方と難波別院報恩講での交流会、1月の一

泊研修会と、交流するたびに楽しく過ごしているんなお話をするようになりました。そんな中、一人の男性がぼつっともらした「人

との繋がりは温もりや」。当たり前の一言でありましたが入所者の方々との交流を重ねていくことにこの言葉が重く、大切だと痛感します。

私にとって入所者の方々との交流はまだまだ始まったばかりで分からないことや難しいことも多いですが、「温もり」を大切にして、これからも楽しく出遇い続けていければと思っています。

(ハンセン病交流会実行委員

第12組円照寺・桑田和貴氏)

## ボランティア講座く教区ボランティア推進会議く

教区ボランティア推進会議では、去る12月10日、教区教化センター会館研修室で「家族はつくるもの―里親運動を通して―」と題して、伊東憲秀氏(第1組順教寺住職)を迎えて公開講座を開催しました。伊東氏は21年前から里親として、さまざまな事情を抱える子どもを預かる活動を行っており、預かった子どもたちと家族関係を築いていく中で、自らが育てられていくことを多くのエピソードを交えながら語られました。今回、聴講いただいた方から講義を聞いての感想をいただいております。

ドラマやCMに登場する家族はカッコいいお父さん、優しいお母さん、そしてかわいい子どもたちと仲良し家族。それに比べ

ると我が家は……。誰でも一度はそう思ったり嘆いたりしたことがあると思います。家庭とは、一人ひとり違う個性の家族の集

まりであり、一つ屋根の下で暮らすことは本当に大変です。自己主張が強く、言い争いや喧嘩が絶えません。

伊東氏は里親という立場から「親や子どもといっても違う人格、感じ方やしたいところが違うのが当然です。しかし、家族が何か一つのことをしようとするとき、自己犠牲が自己犠牲と感じないような家庭を築きたい」と言われます。伊東氏は現在2人の里子を育てられていて、今までに70人以上の短期・長期の子どもの里親をされてこられました。「里子たちはみんな安心していられる自分の居場所を求めている、それが確認できたとき、里親に本当に大きな喜びと感動を与えてくれる」と言われる伊東氏の言葉には情熱と、深く人の人生にかかわっていく強い決意と自信が感じられました。

現在、日本の社会は混乱に陥っているようです。勝手な個人主義が主張されていて、なるべく人とのかわりを持ちたくないという風潮が蔓延しています。人として本当の喜びは人からしか与えられないのではないのでしょうか。

伊東氏は「子どもが希望と夢を持てる社会が本当によい社会で、それこそ同朋社会の顕現である」と言われました。テレビやCMに出てくるかっこいい家庭でなくてもよい。本当に子どもが安心していられる家庭、社会を作るのが我々大人の役目、責任

であると実感しました。

(ボランティア推進会議委員

第3組圓覚寺・乙部文子氏)

「家族は作るもの」とは、里子との生活を通して実感された伊東氏の言葉です。いつもの時間にみんなで集まって一緒に食事をする。たったそれだけのことですが、家族の一人ひとりが協力することによって初めてできることです。血縁があればそれで家族なのではありません。本当は努力によって、家族が成り立っているのです。当たり前と思っていることが本当は当たり前ではないと、里親として里子と生活する中で再発見したと話して下さいました。

言うまでもなく、里子になる子どもは大変な逆境の中にいます。時には、自らを否定してしまいたくなるような状況です。伊東氏は、そんな居場所がないと思っっている子どもが、本当に安心できる場所を取り戻せることを願われています。

「能令瓦礫變成金(よく瓦礫をして変じて金と成さんがごとし)」。石ころのように思っていた人生が、金になって光り輝くことを。生まれてきて良かったと、里子が実感してくれることを願って里親をさせていただきます。そしてその中で、自らもまた育てられるのだとお話くださいました。

(しやらりん編集委員

第4組常楽寺・久世見証)

# 親鸞の鼓動

七百五十年の響き

八

源信は942年に奈良の南西の大和国葛城下郡当麻郷というところでお生まれになりました。お父さんは占部正親、お母さんは清原氏の出身の女性とされています。そして956年頃に、良源を師として天台の僧侶になったといわれています。この良源という方は18代目の天台座主ですが、非常に学問ができて、指導力・組織力があり、教団の中でも大切な人物とされています。良源という人に

関して付け

「聖典講座」より

## 「往生要集」

### を読む

□バート・ローズ先生

加えますと、当時の比叡山の学問の衰退を非常に

歎いておられ、学問の復興を願い、967年から横川の定心院というところで四季講という經典の講座をはじめます。春夏秋冬にそれぞれ仏典を一

つ取り上げて、春は『華嚴經』、夏は『涅槃經』、秋は『法華經』、冬は隔年で『大集經』と『大品般若經』を講義し、お弟子さんたちの学問研究の向上に励みました。当然、源信もこの四季講に参加しています。このように、源信は順調に良源のもとで勉強を進めていき、書物を著したり、あるいは論議の中で名声を得て、比叡山でも注目される存在になっていきました。それがある日突然、比叡山の北にあります横川に隠遁し、比叡山の表舞台には一切姿を出さないで、そこにずっと籠って念仏の生活に入ることになります。

源信が最後に比叡山の公式行事に出席したのは、980年に行われた延暦寺根本中堂の落慶法要です。この根本中堂は焼けていたのですが、良源が再建し、その落慶法要が980年に開かれるのです。その法要で源信は錫杖のリーダーとして参加します。

しかし、それを最後に比叡山の表舞台から消えてしまうのです。そして、その翌年の981年に『阿彌陀仏白毫觀』1巻という短い書物ですが、はじめて念仏関係の書物を著します。そして4年後の985年、源信44歳のときに『往生要集』を完成することになるのです。これは日本に浄土教を定着させたという意味で、日本の仏教会のみならず、宗教会全体に非常に大きな影響を与えている書物と言えると思います。

それで『往生要集』を読むときの主な視点と言いますか、中心になるところを見ていきます。まず「厭離穢土」と「欣求淨土」となすけられ最初の2章が、前半部分の中心になるかと思っています。少なくとも後の日本の浄土教に与えた影響ということを考えますと、このあたりが非常に大きな部分であるといえます。まずは「厭離穢土」ですが、その初めに「それ三界は安きことなし、もつとも厭離すべし」という言葉があります。「三界」である迷いの世界の中では安心して過ごせるところはない。だから迷いの世界を超える道を求める必要があるのです。そして、「今その相を明かさば」と、迷いの世界の相について説明してゆきます。その迷いの世界とはなにか。それは「一には地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人六には天」と述べられているように、六道をもつて迷いの世界をみなされています。そして、これらの六境涯を、次から次へと果てしなく輪廻し続ける迷いの世界を、どのように越えていくべきかというのが『往生要集』に一貫している課題であるといえるでしょう。



苦に満ちた迷いの世界について語ったあと、「欣求浄土」では迷いを越えた世界、つまり浄土の相が語られています。源信は浄土を語るときに「十樂を挙げて浄土を讃える」といつて、十種類の樂をもつて、その特徴を語ります。たとえば、一番目は「聖衆來迎の樂」ですが、お念仏をしたら亡くなったときに阿弥陀仏がお迎えにきてくれると言っています。そして四番目では「五妙境界の樂」を挙げていますが、この五妙とは人間の五つの感覚器官（眼・耳・鼻・舌・身）、つまり五根の境界がみんな妙であると言っています。しかし源信は浄土を単に美しくすばらしい世界とは受け取りません。もっと重要なことは、浄土が悟りの境涯で、菩薩の修行を行うのに最も適した環境を提供してくれる世界であると理解されていることです。例えば第七番目の樂は「聖衆俱会の樂」ですが、聖衆というのは菩薩のことです。浄土に行けば、地藏や観音、または文殊のような優れた菩薩たちに出会い、そういう菩薩たちから仏教の教えを聞くことができる。つまり、仏教の修行の場として浄土が開かれてくるのです。そして菩薩だけではなく、第八番目の「見仏聞法の樂」に示されているように、浄土では阿弥陀仏から直接法を聞いて、仏道の修行について指導していただくと述べられています。浄土では迷いを超えていくような教えを学ぶことができる―たぶんこれが源信の一番言いたいことだと思います。ですから浄土というと、一般的にきらびやかで楽しみに満ちた世界と受け止められますが、それが浄土の本質ではありません。もちろん、源信はそのことを

否定しません。しかし彼は、苦しみがない世界を求める人々の願いを受け止め、それに応えつつも、仏道修行の場としての浄土を強調しているように思います。

では、浄土に往生するためにはどうすればよいのでしょうか。この中心的な課題は『往生要集』の第四章である「正修念仏」に述べられています。この「正修念仏」は、世親の『浄土論』に出てきます五念門を中心に説かれています。礼拝門、讃歎門、作願門、觀察門と回向門の五念門です。源信は最初の三門（礼拝門、讃歎門、作願門）を人間の三業にあてはめて考えています。礼拝門は身業として「一心に歸命して五体投地して、遙かに西方に阿弥陀仏を礼したてまつる」と言っています。つまり、両手両足、額を地に着け、そして阿弥陀仏を礼拝するのです。そして、二つ目が讃歎門ですが、「偈頌をもつて仏を讃える」とあります。すので、口業に当たります。

次に作願門ですが、これは心で行う行為とされています。作願門といえますのは、天親の『浄土論』では浄土往生を願うことと示されています。しかし、源信は単に浄土に往生することを願うのみではなくて、作願を「菩提心を発すること」、「つまり必ず私は仏と同等なさとりを開くという誓いを立てることだと述べています。さらに觀察門ですが、これは五念門の中心となります。ここで源信は念仏を文字通り「仏を念じる」行として受け止め、基本的には阿弥陀仏の相を冥想に入り、心の中で觀察していく方法であると論じます。さらに、その觀察の方法には別相觀、惣相觀、雜略觀の三

種類があると述べています。最初の別相觀は、仏の三十二相を一つひとつ心の中で觀察してゆく方法ですが、たとえば、頭のとつぺんに肉髻相という出つ張りがありますが、それなどは仏の三十二相の一つにあたります。阿弥陀仏の三十二相の一つひとつを肉髻相から足の下の法輪相まではつきりと、心の中でイメージしていく修行が、この別相觀の念仏です。そして惣相觀ですが、三十二相を一つひとつ觀察していくのではなくて、阿弥陀仏を全体的に捉える方法です。三番目の雜略觀は、別相觀や惣相觀の高度な觀仏を行うことのできない人に進められている觀仏の方法ですが、それはたとえば阿弥陀仏の額にある白毫を觀察して、そこから放たれた光の中に自分は攝取され救われていることを觀察する方法です。

そして最後に源信は、雜略觀の簡略化された觀察の冥想も行いうこともできない人々が救われる道はないかと問うて、そのようなわれわれ凡夫は、一心に阿弥陀仏の名を称えれば救われると述べています。源信は天台宗の僧ですから、念仏とは基本的には冥想のなかで阿弥陀仏の相を觀察する觀仏行であると抑えますが、ほとんどの人たちは、このような高度な觀仏を行うことはできないことを踏まえて、それらの人々には称名念仏、つまり一心に阿弥陀仏の名を称えることを進めています。本当は、源信が最も言いたかったのは、この称名念仏ではなかったのではないのでしょうか。このような源信を親鸞聖人は七祖の一人として仰がれたように思われます。

（文責・しやらりん編集部）

## 大阪教区

# 御遠忌通信

## 教区御遠忌委員会各部会の現況報告

去る、2月5日、「大阪教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌委員会」の第3回総会が開催され、御遠忌団体参拝・お待ち受け行事などの取り組みが具体化に向けて動き出しました。

当日はまず、2008年12月6日にご逝去された酒井度氏（御遠忌委員会副委員長）の後任について、御遠忌委員会常任委員会で協議された内容が小松崇委員長より報告されました。報告では、後任は、教区門徒会から選出することが望ましいとして欠員補充人事を望む意見もありましたが、組・教区門徒会員の改選が3〜4ヶ月後に迫っていることに鑑みて、次期教区門徒会長が互選されるまでの間、副委員長1名は欠員のまま運営していくことが確認しました。

その後、専門部会から協議経過の報告並びに確認が行われました。以下にその要旨を掲載します。

### 【常任委員会】

今後の教区御遠忌の取り組みを本格化さ

せるため、教区の共通認識の確立をめざし、「御遠忌テーマ基本理念作業部会」が設置されました。この作業部会では、御遠忌基本テーマ並びに御遠忌基本理念（コンセプ

ト）を構築するための原案作成を主な任務とし、有識者の意見聴取や部員相互の協議を重ねる等して、早急に常任委員会に提出し委員会で決定が得られるよう確認されました。作業部会員には菴原淳氏、善澤由岐子氏、森川徹氏、三好泰紹氏、楠樹章磨氏の各委員が就任しています。

その他、常任委員会は随時、御遠忌各専門部会間の調整のため、各部会より進捗状況が報告され、協議が重ねられています。

### 【法要部会】

法要部会では、①教区お待ち受け大会における法要、②教区御遠忌讃仰事業（仮称「教区の日」）における法要、③教区御遠忌における法要が、当部会において協議を進める三本柱となることを確認しました。いずれの法要についても、御遠忌委員会教化事業部会をはじめとする各部会との連携が不可欠であり、ある程度の骨子が定まったところで本格的な協議に入ることになりました。

なお、今後計画される業務を機動的に遂行していくため、法要部会の部員のみならず、それぞれに実行委員会を設置して取り組んでいくことが確認されています。

### 【教化事業部会】

「（仮称）教区お待ち受け月（週）間」（以下「お待ち受け月間」）を設け、2010年3月27日（土）から2010年5月初旬までの期間に青少年・女性・門徒（推進員）を対象にした大会・集い等を、難波別院を会場に行うことが検討されています。特に、教区同朋大会も同期中に難波別院で開催し、お待ち受け大会関連事業として位置付けることが、教区教化委員会との協議を経ながら検討されております。「宗祖としての親鸞聖人に遇う」の宗派御遠忌基本理念のもと、一人でも多くの御同朋が集うことが願われています。

なお、1月19日の会議では、お待ち受け月間中の各大会・集い案を教化事業部会委員が所属する各分野から取りまとめて提出していただきました。中でも、青少年教化や音楽（仏教讃歌・コンサート）などの分類ごとに企画を結んで共催していく案や、「市民連続親鸞講座」として、難波別院以外の市民会館やホテルなどを会場として開催する案なども出され、各教化機関・団体の協力を得ながら取り組む内容が多く提案されました。

今後の課題として、継続的な教化活動については、御遠忌委員会で一時的に担うのではなく、教区教化委員会や教区教化セン





ターの事業として引き続き取り組んでいた  
だくよう要請し、御遠忌委員会の事業が教  
区教化事業に対して屋上屋を架するような  
事にならないよう、密接な連携を図りなが

ら運営することが挙げられています。  
また、北御堂（本願寺派）との連携も視  
野に入れて取り組むことが検討されていま  
す。

### ●作業部会を設置

これまでに提案されてい  
るお待ち受け月間に関する  
内容を整理し、2月17日開  
催の教化事業部会に提出す  
るため、作業部会を設置す  
ることとなりました。作業  
部会委員の選定は正副部長  
に一任され、正副部長のほ  
か、宮部渡氏・小松幹子氏・  
稲垣洋信氏の各委員が選定  
されました。

### 【財務部会】

現代社会の経済状況に鑑  
み、御遠忌予算の大枠はあ  
る程度制限すべきという考  
え方が主流となっています。  
従って、必要な経費を必要  
な割当募財に頼るのではな  
く、「入るを計って出ずるを  
制す」、具体的には教化事業

積立金・教化推進資金保管金・大阪教区宗  
祖親鸞聖人七百五十回御遠忌真宗本願両堂  
等御修復懇志金交付金保管金等の基金を  
ベースに予算を編成するという財務方針案  
が委員会の共通認識となるよう各部会に働  
きかけてゆきたいと考えています。

又、御遠忌予算を何年度から成立させる  
かについては、他の部会の進捗状況をみな  
がら、対応していく予定です。

### 【団体参拝部会】

本山御遠忌本部から提示されている初期  
設定総数11,400席を受け、具体的な  
団体参拝計画策定に向けて、部会並びに作  
業部会の精力的な協議が進められました。

まずこの割当数については、複数の組か  
ら500人を超える大型の団参計画の強い  
要望が相次いだことから、本山御遠忌本部  
と北海道、仙台、東京、三条、岡崎、名古  
屋及び長崎教区から3月を中心とした席を  
ゆずり受け、その結果、追加3,230席、  
全体で14,630席が確保され第1次募  
集となりました。各組長及びブロック長の  
絶大なご協力と協調により、現在までに約  
12,091席分の各組・ブロックへの割  
り当てが決定しました。

引き続き2月を中心とした残る2、

539席について、各組長・ブロック長を  
窓口とした第2次募集が進められていま  
す。

今後は、各組・各ブロック内の団体参拝  
月日座ごとの団体参拝申し込み手続きが、  
7月以降開始され、実施計画が策定される  
運びとなることから、大阪教区としての参  
拝計画の現状での要望や意見、傾向などを  
取りまとめ、本山御遠忌本部への必要な対  
応を図っていく予定です。

### 【広報部会】

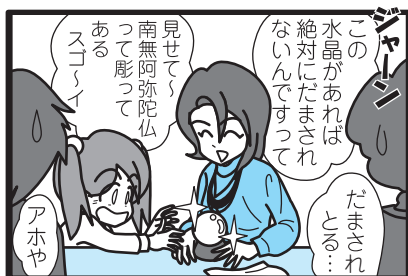
広報部会は、教区教化委員会（主に視聴  
覚伝道部・ホームページ部）や出版会議と  
連携を密にしながら、御遠忌のテーマやコ  
ンセプト並びに「親鸞聖人」その人を広く  
地域社会にもアピールできる内容で取り組  
んでいくべきであると考えています。教区  
教化委員会や出版会議は、通年事業があり  
ますが、御遠忌に対しても積極的に共同作  
業が行える環境確保のため、教区教化委員  
会企画部会との協議の場を設けていきたい  
と考えています。（3月16日実施）

特にこれまでに無い手法での広報活動の  
展開も模索しています。



# しゃらりんちゃん

あいつけや! 編



## 緊急差し替えコラム

### 「葬儀雑感」

時折、ご葬儀の後で遺族よりこんな声を聞くことがある。「悲しんでる間がないわ」と。何を言っているのかといえは、ご葬儀が忙しすぎるということである。

確かに葬儀社との打ち合わせは、祭壇、棺桶の種類にはじまり、霊柩車は和風か洋風か、数あるギフトカタログからお通夜の「粗供養」を選んだと思えば、次は葬儀時の「粗供養」。「もう、どれでもええわ」と思っていると、住職はお内仏のお飾りが間違っていると言いながら勝手に触っている。

今、最愛の家族が亡くなったばかりなのに、枕経から通夜、葬儀に至るまで、焼香順から、仕上げ料理の数、供花の名札まで、決めなければならないことが多すぎる。「悲しんでる間がないわ」という声もよく分かる。そういう声を聞くと、現代葬儀のあり方に大きな問題を感じ、僕なりにナントカせねばという改革意識がメキメキと沸いてくる。

そんなある時、地域の先輩のお父さんが亡くなった。お通夜、葬儀と弔問させてもらった。これもまた従来の大変パタパタとした葬儀だった。先輩の姿を見かけたが、忙しさが表情に出ている感じを受けた。

その後、満中陰が過ぎるか過ぎないかの頃、PTAの集まりで先輩と顔を合わせた。「ご葬儀大変でしたね。ご苦労さまでした」と声をかける。と先輩から意外な答えが返ってきた。「うんっ、大変やった。けど、あの大変なのがよかったわ」「えっ?よかったんですか?」思わず聞き返した。するとこう答えられた、「いやなあ、思ったんや、もしも、死んだオヤジと俺だけが、ポツンとおったら、悲しくて悲しくて、ただそれだけやったかもしれへん。けど、あれもせなアカン、これもせなアカンとパタパタしてるとなあ、なんかしらんけど、死んだオヤジが『おい、頑張れよ、お前がシッカリせなアカンねんで、次はお前の番やねんで』って背中を押されてるような気がしたんや」と言われた。

僕は忙しすぎる葬儀がダメなんだと思っていた。しかしその忙しさが、亡き人から背中を押されているんだと背筋を伸ばす人がここに居る。ご葬儀が忙しすぎることにはまだまだ疑問もあるが、ご葬儀を出すことが亡き方からの最後の教えとして、自分を一步前に押し出してくれていることになっているのではないだろうか。

(廣瀬 俊)

\*「ちょっといこか」で紹介予定だったお店が締め切り間際に移転してしまったため、急遽、このコラムへと差し替えさせていただきます。

## 編集後記

◆ 本山の青少年センター準備室よりリーフレット用の4コマ漫画の依頼を受けました。『しゃらりん』をご存じの方が私の名を挙げられたとのこと。「しゃらりんちゃん」の全国デビューかーと思いました。◆ ところが、あいにくオリジナルの話でした。◆ どころからどう話がまわってくるかわからないものです。思えば教区の教化事業に関わらせていただいている現状も、全てどなたかからのお声がかかりが切つ掛けです。最初、青少年団体への参加を呼びかけられ、そこでの活動を通して出会いが生まれ、実行委員、『しゃらりん』編集員と、あれよあれよと現在に至っています。

◆ 決して積極的ではない私なのに、多くの教化事業に関わっていることが自分でも不思議なくらいです。いずれのご縁も、怠け者の私に対するお導きであろうと感謝しています。◆ と言いつつ、自分のキャパを超えた仕事はしんどく、これ以上引き受けるのは止めようと誓った年始でした。(H)

発行日:2009年4月1日

発行所:真宗大谷派大阪教務所  
大阪府中央区久太郎町4-1-11  
TEL06-6251-4720

発行人:五辻信行

編集: 第4組 常楽寺・久世見証  
第9組 浄園寺・難波美千子  
第10組 是三寺・北川浩三  
第12組 清澤寺・澤田 見  
第17組 法観寺・廣瀬 俊  
第27組 願隨寺・平野圭晋  
第27組 信證寺・吉内利彦  
第27組 浄宗寺・畠中晃子

<http://www.icho.gr.jp/shararin/>